

斎藤清のコラグラフ作品に関する一考察

伊藤 たまき (やないづ町立斎藤清美術館)

斎藤清(1907-1997)は、国内外に多くの愛好家を有する日本現代版画を代表する画家である。1940年代後半から駐日アメリカ人を中心に注目され、1951年第1回サンパウロ・ビエンナーレで、『凝視(花)』が駒井哲郎の銅版画とともに在サンパウロ日本人賞を獲得、国際的な人気と評価を不動のものとした。京都の寺社、仏像、埴輪、生れ故郷である雪深い会津の風物といったテーマに加え、モチーフを単純化し厚みのある簡潔な色面で構成するイメージは、西洋美術とも、また浮世絵や創作版画とも一線を画する独自のものであった。

ところが1950年代末から、版材のマチエールを強く意識した作品を数多く制作するようになる。その最たるものが、1960年代に集中的に制作したコラグラフ作品である。コラグラフは、ハードボードにジェッソや、セメント粉などを練り込んだ木工ボンドを塗り重ね、さらに様々な素材を貼りつけて版を作る技法で、斎藤は1956年の初めての渡米の際に考案者のグレン・アルプスから直接学んだ。版材が生み出す複雑で立体感のあるマチエールに、斎藤が新たな表現の可能性を見出したことは、例えばバニヤンツリーやヌードを描いた一連の作品が顕著に示しており、うねるような質感を活かしてモチーフの生命感や内面性までも見事に捉えている。

斎藤のコラグラフ作品の意義について、美術史上ではこれまでほとんど論じられてこなかった。しかしその画業を見渡せば、コラグラフとの出会いが大きな転機となったことがうかがわれる。1960年代を境にして斎藤の作品は、色面による構成から複雑なニュアンスを持つものへと変化していく。特に1970年代から現れるようになる、繊細なグラデーションによる陰影は、元来平面化への志向を持つ斎藤が排除してきた要素であり、実際1950年代の作品にはほとんど見られない。その斎藤が陰影に意味を見出し画面に取り入れるようになる最も大きな起因こそ、斎藤にマチエールの持つ豊かな表現力を気づかせたコラグラフだったと考えられるのである。

さらに、画材の物質感を重視し、そこに生命感や精神性を見出す感覚、そして1960年代という時代を鑑みれば、斎藤のコラグラフ作品からは、同時期の日本で絵画のみならず立体や工芸、書など広範囲の分野で流行していた、アンフォルメル様式へのシンパシーを読み取ることができる。木版画を主とする斎藤が、コラグラフという技法に関心を抱き集中的に制作した背景にあるのは、こうした同時代の美術思潮であり、斎藤はいわば版画というジャンルでそれを体現した画家という解釈も成り立つのではないだろうか。斎藤清のコラグラフ作品は、その画業においても、日本の現代美術の動向をたどる上でも、重要な意味を持つものと思われる。